



～ワクワクする家庭科の授業づくり～

令和6年度の教育活動が残り1か月余りとなりました。家庭科では、「いっしょにほっとタイム」の計画をワクワクしながら立てたり、「地域かかわりプロジェクト」や「持続可能な社会の取組」を真剣に話し合ったりしていることでしょう。

さて、第1回研修会では小清水先生から講話の冒頭で、「家庭科をなぜ学ぶのですか？」という問い掛けがありました。家庭科主任になられたばかりの方は少しドキッとしたかもしれません。

子供たちには胸を張って「家庭科を学ぶのは、生活をよりよくなる力をつけるため」と答えたいと思いました。だから、家庭科で学ぶ事実的な知識が、衣食住に関する実践的体験的な活動を通して、子供たちの健康で豊かなよりよい生活を支える力になっていけるよう、家庭科の授業をつくっていかねばなりません。



また、目指す授業は「子供が主役の授業」になるよう、主体的に課題を自分事としてとらえる工夫をする必要があります。子供たち自身が「試してみよう」「こうしたらうまくいかな」と試行錯誤しながら、日常生活の中に問題を見出し、課題解決に向けて意欲的に学習に取り組むようにしたいと考えます。

現代社会においては、グローバル化による多文化共生や、多様性の認識が浸透しつつあり、家事の有り様や性別役割意識も変化しています。子供たちが家庭の仕事を通して、「家族の役に立ちたい」「家族と楽しく過ごしたい」という気持ちを育み、人と協働する大切さやその意義を感じてほしいと思います。

日本の国では、子供のいる世帯がとうとう2割を切りました。少子化の波は嵐となり、やむことがありません。そんな子供たちが明日の家庭科の授業をワクワクできるよう、知恵を出し合っていきましょう。また、家庭科の授業を通して、子供たちと一緒に豊かでよりよい生活づくりができる教師を目指していきましょう。私事ではありますが、長きに渡り、小学校家庭科研究部にお世話になり、ありがとうございました。

小学校家庭科研究部顧問校長（浜松市立瑞穂小学校） 柳瀬 美穂

第61回 全国小学校家庭科教育研究会

全国大会 三重大会 報告

令和6年11月22日 亀山市立亀山西小学校、亀山市文化会館

全国大会主題

豊かな心と実践力を育み、未来を拓く家庭科教育

研究主題(三重大会)

ともに生きる生活者の育成をめざして

公開授業参観・研究協議より

★公開授業参観

5年 「着方の工夫で快適に」「生活を支える物やお金」

6年 「地域の人に感謝の気持ちを伝えよう」

亀山市立亀山西小学校では、研究主題を「自らの生活を工夫し、よりよくしようとする子供の育成～主体的・協働的に学ぶ授業づくり～」とし、家庭科を柱として研究を進めています。地域の「ひと・もの・こと」を活用しながら、自分たちの生活の中にある身近で魅力のある課題を発見し、それを主体的・協働的に解決することを通して、自らの生活をよりよくしようと工夫する力を育てる授業を行っていました。

5年の授業実践では、題材の終わりで実際の生活場面を想定したパフォーマンス課題に取り組む場面でした。「着方の工夫で快適に」では1月に亀山市に遊びに行く時の服装を、「生活を支える物やお金」では新しく買い替える筆箱を、それぞれ選択肢の中から選ぶ活動でした。課題が身近なものであったことで、子供たちは自分事として捉え、それまでに学習を通して身につけた知識やスキルを総合して、よりよい選択をしようと意欲的に取り組んでいました。全体交流の場面では、子供たちが次々と発言したり、友達の発言に反応したりと、自然に話し合いが盛り上がる様子が印象的でした。

6年の授業実践では、地域の人々との関わりを見つめ直すことを通して課題を見付け、「地域の人々との関わりをもっと深めるには、何ができるだろうか。」と解決方法について話し合う場面が見られました。また、地域の方に感謝を伝える会を計画している学級では、「どうしたら参加者全員が楽しめて、関わりを深められる交流ができるのか。」という視点で交流会の活動内容を見直す話し合いが進められていました。教師も子供たちとの対話を大切にしながら授業を進めており、多くの子供たちが課題を解決するために積極的に意見を出している様子が印象的でした。

★研究協議会

- ・2年間の取り組みの中で、どの教員も即実践できる家庭科の授業づくりを目指して、パフォーマンス課題を取り入れたり、カリキュラムマネジメントを行ったりしていた。
- ・山場のパフォーマンス課題は、家庭科の本質に迫る学習課題を設定するのがよい。また、パフォーマンス課題に行きつくまでの学習を大切にしたい。
- ・家庭科の学習では、5年生で今の自分のよりよい生活を、6年生で地域の人々とのよりよい生活を考える。

- ・授業改善に向けて、まず家庭科の専門性や指導要領と関連させ、子供たちにどうなってほしいかを考える。また、題材を教えるのではなく、題材を通じて目標に迫ることを考える。
- ・これからの家庭科教育は、急激な社会・家庭生活の変化に対応し、いつまでも新鮮な教材開発をしていかなければならない。そのためには、中・長期的な取り組みにより成果を検討していく必要がある。

全体指導より

文部科学省 教科調査官 熊谷有紀子 氏

- 研究テーマや目指す子供像を具現化するために
 - ①学習指導要領と解説を読み、育成すべき資質・能力を確認する
 - …扱ったつもりになっていないか、ねらいがずれていないか、教師が大切に思っていることを扱っていないか
 - ②問題解決的な学習を充実させる
 - …「子供の現状」⇔「なりたい自分や願い・そのための見通しや期待」
このギャップを埋める課題設定が必要
 - ③指導と評価を一体化する
 - …クラス全員がBとなる授業を目指す
- 日々の授業の質の向上のために
 - ①研究の目的は、子供たちの「資質・能力の育成」のため
 - ②研究は、目の前の子供たちのために行うもの
 - ③研究会に参加するのは、子供の姿を通して授業を見て、自身の授業を見つめ直し、改善につなげるため

本年度も「よりよい生活を自ら創り出す子供の育成」をテーマに研修を進めてきました。全3回で、新しい教科書活用の工夫についての講話、小中合同での研修、小物作りの実技研修、和田小・都田南小での授業研修など、有意義な研修ができました。

今後も、充実した家庭科の授業の実現につながる研修の場となるよう、役員一同取り組んでいきたいと思っております。1年間、家庭科部の活動に御協力いただき、ありがとうございました。

庄内小学校 原田 佳代子